近世印刷本ファエドルス集の構成について

吉　川　　斉

1. はじめに

解放奴隷ファエドルスの名のもとに伝わるファエドルス集は、1 世紀前半に編纂されたと目される、ラテン語韻文イソップ集である[1)]。5 世紀頃の作家アウィアヌスは、ファエドルス集が 5 巻本であったと伝えており[2)]、ファエドルス集全体としておよそ 90 話が伝存する。ところが、散文化されたファエドルス集由来の話が中世以来のヨーロッパでもよく読まれていたと考えられる一方で、ファエドルス集そのものについては、写本がさほど残っていないこともあり、不明な点が多い。実際、ファエドルスに関する同時代的な言及も乏しく、5 巻本であることや各巻の構成を含めて、実態が詳細に伝わっているわけではない。

ところで、ファエドルス集の印刷本は、16 世紀末以来、たびたび刊行されてきた。刊行される際、掲載される話の順番は概ね主要写本に沿ったものにみえ、20 世紀の校訂本でも、多少の組み替えはみられるものの、大幅な変更はない。他方、近年刊行された校訂本では、話の掲載順（各巻の構成）について、大胆な提案がなされている[3)]。本稿は、その提案の是非を議論するものではないが、むしろそうした提案に触発されて、印刷本が刊行され始めた時期の実態を改めて検討し、ファエドルス集の在り方に関して考察を意図するものである。

1.1　ファエドルス集の写本と初期印刷本について

ファエドルス集の印刷本は、写本 P（codex Pithoeanus）および写本 R（codex Remensis）と呼ばれる、いずれも 9 世紀頃の二つの写本を中心に編集されてきた[4)]。写本 P と写本 R は、同じ話が同じ順序で配列されており、数少ないファエドルス集の写本のなかで、含まれる話数がもっとも多い。1596 年刊行の最初の印刷本は写本 P をもとに編集され、

1617年刊行の印刷本から写本Rも参照されるようになった（両印刷本については後述する）。ただ、残念ながら、写本Rは1774年に焼失して現存しない。以下、写本Rに関する記述は、消失前までに写本Rを参照して記述された種々の文献からの推測に基づく[5]。

5巻本とされるファエドルス集について、写本PおよびRでは、巻の始まりや終わりを示す文言が部分的に残るが、写本Pでは、4巻に分けられた状態、すなわち5巻の始まりや終わりに関する記載なしでファエドルス集が記される。一方、写本Rでは5巻の終わりへの言及が残っていた。両写本における、巻の始まりを示す頭語、巻の終わりを示す結語の記載状況は、以下のとおりである[6]（○は記載あり、×は記載なし。［頭語］巻数［結語］の順で表記）。

写本P：［○］第1巻［×］［○］第2巻［×］［×］第3巻［○］
［○］第4巻［×］（［×］第5巻［×］）
写本R：［○］第1巻［×］［○］第2巻［×］［×］第3巻［○］
［○］第4巻［×］［×］第5巻［○］

なお、第3巻については、ファエドルス自身に言及する長めの一編に「librum exarabo tertium Aesopi stilo（私はイソップの筆で三番目の本を記そう）」（29行）との記述があり、その一編が第3巻の序歌と目されるため、そこを区切りと判断できる。

各巻の構成を考えるうえで、巻の区切りは大きな問題である。頭語・結語などをふまえると、とくに第4巻と第5巻の区切り方は、編者に委ねられることになる。初期の印刷本は基本的に写本の配列を維持するものであるが、ファエドルス集を5巻本とする認識は共通している。そのため、いずれも5巻に分けて編集されており、その分け方に編者の判断を窺うことができる。

ファエドルス集の初期印刷本は1596年の最初の印刷本を契機として、およそ四半世紀のあいだに複数の編者によって刊行されている[7]。そのうち、本稿で中心的に取り上げるのは、次の2冊である。

1）Pithoeus本

Pithou（Pithoeus），P.，*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum*

libri quinque, nunc primum in lucem editi, Augustobonae Tricassium（Troyes）, 1596.

2）Rigaltius 本

Rigault（Rigaltius）, N., *Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum libri quinque, noua editio*., Lutetiae Parisior.（Paris）, 1617.

1）はいわゆる editio princeps（最初の印刷本）で、写本 P をもとにしている。編者の Petrus Pithoeus（Pierre Pithou, 1539–1596）は、フランスの著名な法律家であり、古典学者である。彼は、もともとカルヴァン派であったところ、サンバルテルミの虐殺（1572 年）ののちにカトリックに改宗。アンリ 4 世の支持者であった[8)]。彼のファエドルス集は、弟のフランソワ（François Pithou, 1541–1621）が入手したという写本に基づくもので[9)]、現在の P 写本（codex Pithoeanus）の呼称はこの印刷本に由来する[10)]。

1）の刊行後、Pithoeus 本（あるいは写本 P）を再検討し、注釈を加えたファエドルス集が数種出版されている。興味深いのは、editio princeps への配慮からか、いずれの本にも基本的に Pithoeus 本の序文が印刷されている点であり、これは 2）でも共通する。

2）は、フランスの文献学者 Nicolaus Rigaltius（Nicolas Rigault, 1577–1654）を編者とする。Rigaltius はイエズス会の学校（コレージュ）で教育を受けた法律家であり、古典学者である。ルイ 13 世の時代、王室図書館で司書として活動した[11)]。彼は 1599 年、1617 年、1630 年、と三度にわたりファエドルス集を刊行しており、そのうち、1599 年版は写本 P と第 1 巻から計 8 話を含む別の写本（写本 D）を用いて編集したものである[12)]。1617 年版では、新たに入手したという写本 R も参照されており、1630 年版では、1617 年版に若干の修正が施された[13)]。本稿では、写本との関係をふまえて、これら Rigaltius 本のなかでも、1617 年版を主な検討の対象とする。

また、この時期の印刷本では、それぞれに印刷の体裁上の特徴もみられる。Pithoeus 本では、立体活字と斜体活字が使い分けられている。序や教訓部、話の前置きにあたる、ファエドルス自身による主張とみなされる一種の「地の文」は立体活字、「話」本体は斜体活字である。話にはタイトルが付されており、それが個々の話の区切れともなる。また、

立体活字だけで構成される話は、すべてが「地の文」となるが、そうした判断は編者によるものである。一方、Rigaltius 本では、活字による区別はなく、「地の文」も話本体も斜体活字が用いられる。「地の文」と話本体の区別は示されないものの、話内部での区切りには字下げとともに（多くの場合）葉模様の印が置かれており、区別が意識されていたことは窺える。また、話と話の区切りには、飾り模様の帯が置かれる。個々の話にタイトルは付されない。なお、Pithoeus 本のあとに出版されたファエドルス集では、各話にナンバリングが施される場合が多く、Rigaltius 本も 1599 年版と 1630 年版ではナンバリングが施されている。しかし、Pithoeus 本と Rigaltius 本の 1617 年版では、ナンバリングは施されていない。

1.2　本稿について

本稿では、以上をふまえて、Pithoeus 本と Rigaltius 本の 2 冊を主な対象として、1）巻の区切り方、2）話の区切り方、について検討し、さらに、3）第 1 巻序歌のテクストの読みについて取り上げ、写本との関わりにも注目しながら、ファエドルス集の初期印刷本について実態を確認する。

Pithoeus 本を契機に、ファエドルス集は広がることになった。古代の（オリジナルの）ファエドルス集の探求も重要であり、従来から重視される傾向にあるとも思われるが[14]、その一方で、ファエドルス集について、17 世紀以降のヨーロッパで「実際に何が読まれたか」という作品普及や伝播を考える観点からは、むしろ印刷刊行本の在り方に注目することも有意義だろう。

たとえば、ラ・フォンテーヌ（Jean de La Fontaine, 1621–1695）は『寓話詩』*Fables choisies*（1668–1694）の序でファエドルス集に言及しているが[15]、未知の写本があったのでなければ、彼が手にしたファエドルス集は 17 世紀の印刷本であった可能性が高い。この場合、考えるべきは 17 世紀のファエドルス集であって、古代のファエドルス集でも現代のファエドルス集でもないはずである。

2. 巻の区切り方

まずはPithoeus本とRigaltius本の巻分けについて見ていこう。前述のとおり、写本の状況から巻の区切り目で問題になりそうなのは、第4巻と第5巻の区切れである。ところが、実際には、第1巻、第2巻が共通で、第3巻以降に相違が見られることを確認できる。

2.1 第3巻／第4巻

Pithoeus本とRigaltius本では、第3巻末尾の話が異なる。具体的には、Pithoeus本ではASINVS ET GALLIと題されて第4巻冒頭に配置される話が、Rigaltius本では第3巻末尾に配置されている。また、Rigaltius本の初版からすでにその配列となっており、写本Rの影響によるものでもない。写本にみられる巻分けの頭語・結語に従えば、Pithoeus本の配列が写本どおりであるため、Rigaltius本は、編者Rigaltiusが、誤りでない限りは選択的にそのように配置したものである。

第3巻と第4巻の境界にある話は、次のとおりである（タイトルはPithoeus本による。以下、タイトル冒頭の丸数字は参照のために筆者が付したもの[16]）。

① AESOPVS RP. GARRVLO（Pithoeus本第3巻末尾）
② ASINUS ET GALLI（Pithoeus本第4巻冒頭／Rigaltius本第3巻末尾）
③ POETA（Rigaltius本第4巻冒頭）

①②がタイトルに示される逸話を主体とする話であるのに対し、以下に示す③は特徴が異なる（テクストはPithoeus本による）[17]。

Ioculare tibi videtur & sane leue
Dum nihil habemus maius, calamo ludimus:
Sed diligenter intuere has nenias,
Quantam sub illis vtilitatem reperies?
Non semper ea sunt quae videntur; decipit 5

Frons prima multos: rara mens intelligit
Quod inferiore condidit cura angulo.
Hoc ne locutus sine mercede existimer,
Fabellam adiiciam DE MVSTELA ET MVRIBVS.
……

あなたにはこの本が冗談を語っているように思われるでしょう。確かに、重要なことを何も持たないかぎり、私は筆で軽やかな戯れをしています。けれど、これら些末な作品を注意深く眺めてください、あなたはその下にどれほどの有用性を見出すことでしょうか？みえるものがいつもそのとおりであるとは限りません。最前部が多くの者を欺きます。作り手が配慮して下層の隅に隠したものを把握する知性は稀です。私が無益に語っていると思われないように、「イタチとネズミ」の話を付け加えましょう。……

ここに引用した「地の文」では、ファエドルスが提示する個々の話に関する話題がもちだされ、一見軽くみえる話には有用性が内包されており、見た目がすべてではない、という主張がなされる。しかも、多数が見た目に騙され、下層部を認識する知性が希少であることも語られるのであり、そのような題材を提供する作者自身の自負心も垣間見える。

①②にも「地の文」は含まれるが、あくまで話への前置きや説明として三人称で語られるのにたいして、③の「地の文」では、ファエドルス自身の語りとして一人称（さらには読者に向けての二人称）が用いられ、そうした内容を無益に語っていると思われないように、「イタチとネズミ」の話を「（私が）付け加えよう」（adiiciam）と述べられる。すなわち、「イタチとネズミ」の話は添え物扱いであり、③において主体は「地の文」の方と考えられる。

ところで、第3巻までは、各巻が「序」とみなしうる「地の文」による一編で始まる。一方、②は、「不幸に生まれたものは、悲しむべき人生を送るばかりか、死後も運命のつらい惨めさがつきまとう」と述べられて導入される話であり、内容的にも、積極的に第4巻の冒頭に配置する理由はないように思われる。Pithoeus 本は、写本の記載に忠実に、②を第4巻冒頭に配置したが、Rigaltius 本は、それよりも「序」としてふ

さわしい③を第4巻冒頭に配し、写本の話順は保ちつつも、ファエドルス集としてより体裁を整えたのではないか。最初のRigaltius本から一貫してその配置であることを考えると、Rigaltiusが意図的に写本の記載から区切れをずらす判断を行ったものとみて問題はなさそうである。

2.2　第4巻／第5巻

前述のとおり、第4巻と第5巻の区切りについて、写本には手がかりがない。しかしながら、Pithoeus本とRigaltius本を比較すると、第3巻／第4巻の場合と同様に、区切り箇所に1編のずれがみられるのみである。実際には、Pithoeus本で第4巻末尾に置かれる話が、Rigaltius本では第5巻冒頭に配置されており、第3巻／第4巻の場合とずれ方は異なる。また、Rigaltiusは初版からこの区分けとしており、1617年版で導入されたものではない。

第4巻と第5巻の境界にある話は、次のとおりである（タイトルはPithoeus本による[18]）。

④ POETA
⑤ IDEM POETA（Rigaltius本第4巻末尾）
⑥ POETA AD PARTICVLONEM
（Pithoeus本第4巻末尾／ Rigaltius本第5巻冒頭）
⑦ IDEM POETA（Pithoeus本第5巻冒頭）
⑧ DEMETRIVS REX ET MENANDER POETA

④⑤⑥⑦は、Pithoeus本ではすべて立体活字で印刷されており、いずれも「地の文」のみで構成される話と判断されている。Pithoeus本全体を通じて、「地の文」のみの話が4編連続する箇所はここを除いてみられない。④は詩人シモニデスを主役とする小話であり、必ずしも「地の文」というわけでもないが、残り3編はファエドルスによる主張とみなしうる。「地の文」のみ3編連続とみた場合も、Pithoeus本ではこの箇所のみである。加えて、⑥においては、後述のとおり「第4巻」（quartum libellum）を読み通すことへの言及がみられる。その点で、ここはある種の特異点と呼ぶべき箇所であり、Pithoeus本とRigaltius本がこの流れのなかに第4巻／第5巻の区切りを置いた姿勢は十分に理

解できる。つまるところ、⑤⑥の間で区切るか⑥⑦の間で区切るかの判断であり、Pithoeus は後者を、Rigaltius は前者を選択した、ということになる。

⑥では、パルティクロなる人物（ファエドルスのパトロン？）への呼びかけが行われている（テクストは Pithoeus 本）。

……
Quare Particulo, quoniam caperis fabulis　10
Quas Aesopias non Aeopi nomino
Quasi paucas ostenderit, ego plures dissero,
Vsus vetusto genere, sed rebus nouis,
Quartum libellum dum vaciue perleges,
Hunc obtrectare si volet malignitas,　15
Imitari dum non possit, obtrectet licet.
……

……それゆえ、パルティクロよ、あなたは「話」の虜なのですから、——それらの「話」を私は「イソップの」ではなく「イソップ風の」と呼びます、イソップは僅かな話を示しましたが、私は、古い様式に、しかし新奇な事々を用いて、より多くの話を広めているわけですので——あなたが気長に第 4 巻を読み通す間に、もし悪意のある人がこの本をけなそうと考える場合も、その人が模倣もできないようであれば、けなさせておきましょう。……

ファエドルスは、イソップよりも多くの話を生み出しているとして、自身が示す話が「イソップの」ではなく「イソップ風の」話であると語り、自負心を示す。また、14 行目からは、「あなたが気長に第 4 巻を読み通す間に、もし悪意のある人がこの本をけなそうと欲する場合、模倣できないようであれば、けなさせておけばよい」と読める。この内容をふまえると、⑥は第 4 巻に含まれるのが適切であるようにも思われる。しかし、パトロンと思しき人物への呼びかけや、perleges という未来時制で語られる内容が、初出で巻末に配されるべきかどうかは一定の疑念が残る。また、Pithoeus 本と Rigaltius 本で、第 5 巻半ばにやはりパル

ティクロへの呼びかけを行う一編が含まれる点も、問題を複雑にする。

一方、Pithoeus 本が第 5 巻冒頭に置く⑦は以下の一編である（テクストは Pithoeus 本）。

Aesopi nomen sicubi interposuero
Cui reddidi iam pridem quicquid debui,
Auctoritatis esse scito gratia:
Vt quidam artifices nostro faciunt seculo
Qui pretium operibus maius inueniunt, nouo 5
Si marmori adscripserunt Praxitelen, suo
Detrito, Myronem argento. fabulae exaudiant
Adeo fugatae. plus vetustis nam fauet
Inuidia mordax quam bonis praesentibus.
Sed iam ad fabellam talis exempli feror. 10

もしどこかで私がイソップの名をさしはさむ場合、イソップにはずっと前に借りは返しておりますので、権威付けのためとお知りおきください。すなわち、当世の職人たちが、新しい大理石像にプラクシテレスと、銀の磨き細工にミュロンと書き加える場合の、作品にさらなる価値をでっちあげるときに行うようなことです。人々は、これまで斥けられていた話に耳を傾けるでしょう。というのも、すぐに噛みつく嫉妬は、現今の良作よりも過去の作品に好意を向けるためです。

ともかくも、今、そのような例を語る話へ進みましょう。

すでにイソップに負っている恩義は返したので、「イソップ」の名を用いるにしても、権威付けのためであるとする、ファエドルスの主張が記される。内容は⑥と同質あるいはそれを強めたものにみえるが、「イソップ風」と呼ぶことを宣言する⑥の直後にあえて続けて行う主張としては、多少の違和感が残ることは否めない。

前述のとおり、Rigaltius 本は⑥⑦を続けて第 5 巻冒頭に配置する選択をとった。もうひとつ、Rigaltius 本と Pithoeus 本の大きな相違として、Rigaltius 本が⑦を⑧の導入部として扱い（⑦ 10 行目 ad fabellam ...

feror が⑧への繋ぎとなる）、⑦⑧をひとつのまとまりとして提示する点も挙げられる。このとき、⑦⑧のまとまりは、③と同様に「地の文」主体の構造をもつ一編となる。Rigaltius が第 4 巻冒頭に③を配置したことを考えると、⑦を第 5 巻冒頭に置く判断も不可能ではなかったはずである。それでも Rigaltius が⑥を冒頭に置いたのは、パトロンへの呼びかけを含む⑥の巻頭「序」としての機能と、同一人物への「呼びかけ」を含む第 5 巻半ばの一編との関係を重視したためだろう。これが、おそらく⑥の「quartum libellum」に注目した Pithoeus との違いに繋がったのではないかと考えられる。

ところで、Rigaltius 本は、⑥の 14 行目について、写本 P、写本 R の読みとして「Quartum libellum dum tu varie perleges」（実際は、写本 P では varie ではなく variae である[19]）を採用し、「vaciue」が Pithoeus の修正読みであることを註（Notae）で述べている[20]。当然ながら、Rigaltius は⑥の「第 4 巻」表記を認識していたことになるが、ここで写本の読みを採用したとしても、「第 4 巻」を第 5 巻冒頭に置く不自然さは解決しない。

第 4 巻／第 5 巻の区切りについては、写本に手がかりがないこととも相まって、Pithoeus 本にせよ Rigaltius 本にせよ、第 3 巻／第 4 巻以上に問題を抱えたままであった。

2.3　解決策？

ここまで検討してきた、とりわけ第 4 巻／第 5 巻の区切りについては、編者よりもむしろ写本の信頼性と関わる問題とも考えられる。確認できる限りでは、Pithoeus 本と Rigaltius 本は、写本の話順配列の維持を基本的な姿勢としている。ファエドルス集をひととおり見通せる写本が写本 P と写本 R のみであり、両者が同一の構成であるという事情があることを考えると、写本 R を参照できた Rigaltius も、写本の話順に一定の信頼を置くことになったのではないかと思われる。とはいえ、ここに初期の印刷本刊行に関わるひとつの限界があったということになるだろう。その後、様々に修正提案が試みられることになる。

たとえば、18 世紀までに刊行された、（特徴的な読みを持つ）ファエドルス集 3 種を確認すると、巻の構成は Rigaltius 本の配列を踏襲しつつ、第 5 巻冒頭⑥の 14 行目を次のように印刷している[21]。

a）Quintum libellum nunc vacive perleges.（Ursin, 1657）
b）Quintum libellum, cum uacarit, perleges.（Bentley, 1726）
c）Quarum libellum dum vacive perleges,（Burman, 1727）

a）は、「quartum libellum」（第 4 巻）を「quintum libellum」（第 5 巻）に修正し、さらに接続詞 dum を副詞 nunc として節ではなくすることで、perleges で文を閉じられるようにしている。b）は、a）と同様に quintum に変える一方、「dum vacive」を「cum uacarit」（時間があるときに）として行内に従属節をつくり、perleges で文を閉じられるようにする。c）は quartum を関係代名詞 quarum に変えるほかは、Pithoeus 本と同じである。

いずれの修正も、⑥を第 5 巻冒頭に維持するための措置として、第 5 巻冒頭における「quartum」の回避を企図したものといえる。また、ここで文を閉じるかどうか判断が分かれており、それが各修正に反映されている。なお、a）と c）は Pithoeus の修正読み（vaciue）を採用するものであり、b）の修正読みも、副詞を動詞に置き換えるものであるが、Pithoeus による修正が活かされており、興味深い。

一方、19 世紀以降に刊行された主要なファエドルス集では、巻の構成について、異なる方針が示される[22)]。第 4 巻／第 5 巻の箇所では、⑥が第 4 巻冒頭に、第 5 巻半ばのパルティクロへの呼びかけを含む一編が第 4 巻末尾に配置される。さらに、それに付随して、Rigaltius 本では第 4 巻末尾の⑤が、第 3 巻末尾に配置される。そして、第 5 巻冒頭は⑦となる。⑥の「quartum libellum」表記およびパルティクロへの呼びかけを受けとめて、むしろ写本の配列を誤りとして、写本の話順配列遵守から脱却し、話の順序の組み替えを行うのである。また、⑤が第 3 巻末尾、⑥が第 4 巻冒頭に置かれることで、第 3 巻／第 4 巻の区切りについても、自ずと Pithoeus 本や Regaltius 本と異なる配置となる。このとき、写本の記載どおりに①を第 3 巻、②を第 4 巻に含めても問題はなく、Rigaltius 本のような区切りの変更は必ずしも必要ない。

こうしてみると、⑥の配置換えによって、半ば自動的に第 3 巻／第 4 巻／第 5 巻の冒頭・末尾の入れ替えが起こり、結果として Pithoeus 本や Rigaltius 本が抱えていた問題が解決されるようにみえる。しかしながら、これは写本の話順配列そのものを組み替えるという、ある種の発

想の転換によってもたらされたものである。写本の配列を疑うとしても、そのような「誤り」が生じた理由は判然としない。ありうることと言えばそれまでであるが、写本の話順配列からの脱却は字句修正以上の大きな改変となるため、全体として収まりがよさそうにみえるにせよ、校訂者の強い決断を要するものであることにも注意が必要であろう。

こうした発想が登場するのが 19 世紀以降であるという点で、これを近代の文献学の進展に伴うものと考えることもできるかもしれないが、本稿ではむしろ、18 世紀までに刊行されたファエドルス集が、基本的に写本 P、写本 R の話順配列を維持するものであり、あるいはそもそも配列変更が発想になかった可能性もあることに注目しておきたい。

ちなみに、19 世紀以降の主要刊本では、⑥を第 4 巻冒頭に配置するため、14 行目は次のように印刷される。

d）Quartum libellum, cum vacarit, perleges.（Müller, 1867, 1877）
e）Quartum libellum, qum uacarit, perleges.（Havet, 1895）
f）quartum libellum cum uacaris perleges.（Postgate, 1919; Perry, 1965）
g）quartum libellum dum uacabis perleges.（Zago, 2020）

いずれも quartum libellum を保ち、この行で文を閉じる判断である。方針として 18 世紀の b）の修正案が受け継がれていることが分かる。d）e）と f）は直説法未来完了の三人称単数 uacarit と二人称単数 uacaris の差であるが、「あなたがお暇なとき」という二人称の方がより素直な表明にみえる。g）は直説法未来二人称単数 uacabis として接続詞 dum を残し、もっとも写本に近い修正案である。400 年以上を経て、Pithoeus 本と一語違いの、しかも Pithoeus の修正読み vaciue を発想として受け継ぐ提案がなされたことになる。

3. 話の区切り方

ここまで、ファエドルス集全体の構成に関わる巻の区切れの問題を論じてきた。Pithoeus 本と Rigaltius 本は、元とした写本の話順配列を保持するものであり、巻の区切り方の変更も、その枠組みの中で行われる

ものであった。一方、両者とも、巻の区切り方を含めて、話の配列を守る限り、個々の話の扱いに関する判断は、編者の裁量に委ねられていた。その結果、本稿 2.2 でもみたような、Pithoeus 本と Rigaltius 本で判断が異なる事例が幾つか存在する。こうした判断の相違は、全体の話数の相違に繋がるものであり、巻の区切れとは異なる点から、やはり「当時の」ファエドルス集の在り方に関わるものといえる。

さて、Pithoeus 本を基準として、Rigaltius 本が異なる判断を示すパターンを整理すると、1）Pithoeus 本が二編に分けているものを統合する場合、2）Pithoeus 本が「地の文」のみと判断する（＝立体活字のみで印刷する）ものを「本文」＋「地の文」とする場合、の大きく 2 つに分けられる。

以下、これらの事例を検討していくことにしよう。

3.1　二編を統合する場合

Pithoeus 本で連続する二編が Rigaltius 本で統合される事例は、2.2 の⑦⑧のほかに、2 例存在する。それらの Pithoeus 本でのタイトルは次のとおりである[23)]。

第 2 巻冒頭：⑨ AVCTOR ／⑩ IVVENCVS, LEO ET PRAEDATOR
第 4 巻後半：⑪ VVLPIS ET DRACO ／⑫ IN AVARVM

第 2 巻の⑨は、「イソップの話」の目的を語るとともに、ファエドルス自身の創作・翻案を窺わせる内容で、第 2 巻の「序」と目される一編である。Pithoeus 本のタイトルは写本 P に従うものであり、これらは写本でも二編に分けられている。

ところが、Pithoeus 本のテクストでは、写本どおりに二編を分けていないことが確認できる。以下、Pithoeus 本の⑨後半と⑩冒頭を引用する。

AVCTOR
……
Ita sic rependet illi breuitas gratiam
Cuius verbosa nescit commendatio.　13

……その場合、簡潔さが話に恩恵をもたらすことになりましょうが、その簡潔さについての冗長な称賛は控えます。

IVVENCVS, LEO ET PRAEDATOR.
　Attende cur negare cupidis debeas;
Modestis etiam offerre quod non petierint.
　Super juuencum stabat deiectum Leo:
……

　なぜ、欲張りな者たちには否と言い、謙虚な者たちには彼らが請わなかったものを提供せねばならないか、聴いてください。
　ライオンが倒した牛の上に立っていました。……

ここでは、「なぜ、欲張りな者たちには否と言い、謙虚な者たちには彼らが請わなかったものを提供せねばならないか、聴いてください」という、⑩冒頭の2行が問題となる。というのも、写本では⑨の末尾に記されるためである。つまり、Pithoeus 本が写本と話の区切り位置を変更したと考えられる。この2行は、⑩の導入としては適切なものであるため、Pithoeus の判断としては、⑨⑩をより明確に分離するために、話の導入となる2行を⑩に移した、ということになるだろう。一方、Rigaltius 本では、写本どおりに上記2行が⑨に戻されるだけでなく、そのまま区切れなく⑩が続く。したがって、Rigaltius 本も写本とは異なる区切りを選択したことになる。

前述のとおり、Rigaltius 本は⑦⑧においても同種の統合を行っている。その点では、Rigaltius の方針は一貫しているようにみえる。なお、⑦も巻冒頭の序の末尾に次の話への導入が含まれる形であったが、導入にあたる⑦の10行目が sed で始まる一文であるため、Pithoeus 本は導入部を⑧に移す選択はとれなかったと考えられる。

第4巻の⑪⑫について、Pithoeus 本では⑪はすべて斜体活字で、⑫はすべて立体活字で印刷される。⑪は地下にある大蛇の巣穴に行き着いた狐が、隠された宝を、神から与えられた仕事といって、「何も得ることもなく、何も与えることもなく」守り続ける大蛇へ、「そういった者は神の怒りによって生まれるのだ」と皮肉を言う話である。宝が大蛇自

身のものであるかどうか不明であるため、ただただ非生産的な仕事を人から与えられて守り続ける者に対する皮肉とも読める。一方、⑫は「強欲な者へ」と題される一編で、ともかく自分の財産を使いたがらず貯め込むばかりの者を揶揄している。

⑫の冒頭は次のとおりである（テクストは Pithoeus 本）。

> Abiturus illuc quo priores abierunt,
> Quid mente caeca miserum torques spiritum?
> Tibi dico, auare, gaudium heredis tui,
> ……

> 父祖たちの去った場所へ去ることになる君は、なぜ、盲目な精神で、惨めな生命を歪めるのですか？　強欲な君、自分の相続人を喜ばせる、君に私は語っています。……

このあと、⑫では、財産を貯め込むケチな「君」の様々な振る舞いが示される。

Rigaltius 本は⑪⑫を繋ぎ、⑪に対する見解として⑫を位置づける。「地の文」を含まない⑪に、一人称による語りの「地の文」のみで構成される⑫が続くため、両者を繋ぐ発想は分かりやすい。しかし、あらためて⑪を見直すと、大蛇は⑫で語られる「君」に該当するかどうか言い切れず、両者は必ずしも繋がらないのではないか、とも思われる。むしろ、⑫と繋ぐことで、⑪の大蛇が⑫の「君」に該当するものと解釈されるようになる可能性も指摘できる点に留意が必要である。

なお、Rigaltius 本で統合される 3 例に共通する特徴がある。いずれも Rigaltius 本初版では Pithoeus 本同様に分けられている。二編の統合は 1617 年版からみられるようになり、1630 年版でも統合は維持されるのである。

3.2 「地の文」を組み替えする場合

Pithoeus 本では立体活字のみで印刷され、「地の文」だけで構成される一編で、Rigaltius 本では途中で葉模様の印が置かれ、話本体＋「地の文」と区別されているようにみえる事例が一例存在する。第 5 巻終盤の、

Pithoeus 本で⑬ TEMPVS（「時」）と題される以下の一編である（テクストは Pithoeus 本）。

Cur sit volucri pendens in nouacula
Caluus, comosa fronte, nudo corpore,
Quem si occuparis, teneas; elapsum semel
Non ipse possit Iuppiter reprehendere.
Occasionem rerum significat breuem. 5
Effectus impediret ne segnis mora,
Finxere antiqui talem effigiem temporis.

この者、鳥のようにすばやく、剃刀を支えに秤をゆらゆら、前髪がフサフサのハゲ頭、身体はむき出しで毛がない。その理由は、彼をもしつかまえれば、分かるでしょう。彼がいちど滑って逃れると、ユッピテルでもつかまえられないでしょう。この姿は、ものごとの好機の短さを表しています。のろのろした遅れが事の成就を妨げないように、古の人々はこのような「時」の模像を造りました。

「時」の模像について説明する一編である。前髪がフサフサなハゲ頭で、身体はむき出しで毛がない、すなわち摑み所が前髪のみという、つかまえにくい姿が示される。Rigaltius 本では、6 行目 Effectus が字下げされ、その前に葉模様の印が置かれる。Rigaltius 本の葉模様の用例からすると、6、7 行目が 5 行目までに対する見解として位置づけられていることが分かる。

実のところ、⑬は、作り話とそれに対する見解というよりも、ある事物への解説記事のような体裁であるため、Pithoeus 本が全体を「地の文」として印刷した判断も不合理ではない。一方、Rigaltius 本では、初版は Pithoeus 本同様の扱いであったが、1617 年版から変更が入り、1630 年版でもそれが維持される。また、1630 年版において、⑬が FABVLA VIII（第 5 巻第 8 話）としてはじめてナンバリングされる点から、1617 年版での変更が、まさに「地の文」からの読み替えを意図したものであったことを確認できる（ただし、1630 年版の目次には⑬が含まれておらず、ちぐはぐな部分も残る）。

なお、⑬1行目の写本Pの読みは「Cursu uolucri pendens in nouacula」であり、冒頭 Cursu を Cur sit とするのは、Pithoeus による修正案である。とはいえ、この修正案はその後あまり支持されておらず、Rigaltius 本では一貫して写本の読みが採用されている。近現代の刊本では、「話」としての読み替えも含めて、1617 年以来の Rigaltius 本が示した在り方が支持されているようにみえる。

興味深いのは、Rigaltius 本の話の区切り方において、二編を統合する事例も、ここでの読み替えの事例も、1617 年版から行われていることである。これらの事例については、Rigaltius が 1617 年版で、写本 R とともに個々の話を再検討した結果と考えてもよいのかもしれない。

4. Rigaltius 本における「読み」の再検討：第 1 巻序を例として

巻や話の区切りから、近世印刷本ファエドルス集の構成に関する検討をしてきた。とくに話の区切りについては、1617 年版の Rigaltius 本からみられる変化が大きく、写本 R 発見にともなう内容の再検討の影響も推察される。実際、Rigaltius 本の註を見る限り、Rigaltius が全体を通じて写本 R（および写本 P）の検討を行っていることを確認できるのである。さいごに、関連する記述が註に残る第 1 巻序に注目して、写本 R が明確にテクストの読みに関わった事例を検討しておきたい。

第 1 巻序は、ファエドルス集全体の冒頭に置かれる一編であり、そこで扱われる題材が何であるか、簡潔に提示するものである。Pithoeus 本では、次のように印刷される。

Aesopus auctor quam materiam repperit,
Hancce ego poliui versibus senariis.
Duplex libelli mos est, quod risum mouet,
Et quod prudentis vitam consilio monet.
Calumniari si quis autem voluerit 5
Quod arbores loquantur, non tantum ferae,
Fictis iocari nos meminerit fabulis.

作者アエソプスが見出した素材、それを私がセナリウスの詩行で磨き上げました。この小さな本の特性は二重であり、ひとつは笑いを引き起こすこと、もうひとつは聡明な人の助言によって人生に忠言を与えること、です。しかるに、もし誰か、獣ばかりでなく、木々も語っているといってけちを付けたいと考える場合は、私たちが話を作り出して冗談を語っていることを思い出しましょう。

2行目のhanccеはPithoeusによる修正である。写本ではhancであるが、Pithoeusは、ファエドルスがegoを出して語る主張に沿って、指示代名詞を強調する形に変えたものと考えられる。ただ、とくに必然性を感じられない修正であり、実際、Rigaltiusは初版から写本どおりのhancとしている。

ここで注目したいのは、3行目のmosである。これは慣習、方法、様式などの幅広い意味をもつ名詞である（上記翻訳では試みに特性と訳している）。写本Pではosと書かれ、のちにmを書き添えmosとする修正の手が加えられている[24)]。

Regaltiusは初版で、3行目を以下のように印刷した。

Duplex libellis os est, quod risum mouet,

すなわち、写本で修正が入る前のosという読みをとり、また、写本ではlibelliと単数属格で書かれる箇所を、libellisと複数与格に変えて音節を維持し、「（これらの）小さな本には、二重の顔がある」とするのである。この点について、Rigaltiusは註で次のように述べている。

Sic repono e Vet. c. MS. Libellis suis Phaedrus duplex os, duplicem vultum, duplicem personam imposuit, risum mouere, & uitam monere.

そのように、私は古い写本に従って戻す。ファエドルスは、自身の小さな本に、二重の顔、すなわち、笑いを引き起こすことと人生に忠言を与えることという、二重の表情、二重の仮面を与えた。

「（私は）戻す」（repono）というように、Pithoeus 本の読みに対する意識もみられる。その後、1617 年版で、Regaltius は 3 行目前半を「Duplex libelli dos est」と印刷し、註では次のように述べている。

> Sic habet Remensis bibliothecae codex. Antea edideram ex Pithoeano, *Duplex libellis os.*（中略）Sed nunc magis mihi placet illa Remensis lectio.
>
> そのように写本 R が読む。以前、私は写本 P に従って、Duplex libellis os. として出版した。（中略）しかし、現在は、私には、その写本 R の読みが、より好ましく思われる。

ここで Rigaltius は、写本 R に基づいて dos という読みを選択したことを明確に語る。また、dos の選択とともに、libellis が写本表記の libelli に戻されている点も要注意である。

Rigaltius が写本の読みに関して、magis mihi placet といった記述を行うのはこの箇所のみである[25)]。dos は「持参金、婚資」を意味する名詞であり、ここでは os 同様に比喩的表現となる。dos と読む場合、「読者のもとに嫁ぐ小さな本が（libelli）、読者にもたらすもの（dos）」と説明できる。これは、os と読む場合（「これらの小さな本には（libellis）二重の顔（os）がある」）よりも洗練された表現にみえるものであり、写本の libelli の読みを保持することにも問題がない。そのため、数少ない写本に窺える os/mos/dos という必ずしも決定打のない選択肢のなかで、Rigaltius は dos を「より好ましい」と評価したと考えられる。なお、この箇所について、Rigaltius 本の 1630 年版では 1617 年版の本文が維持されており、判断に変化はない。そして、近現代の主要刊本は、基本的に Rigaltius 本と同一の読みをとるのである。

以上のように、Rigaltius 本の第 1 巻序は、当人の註も残っているため、写本発見にともなうテクスト再検討の過程を具体的に教えてくれる。すなわち、必ずしも写本に縛られるわけでもないが、基本的には写本の読みを尊重しつつ、場合によっては感覚的なものが判断に反映するのである。個々の話を検討する場合の、編者の写本との向き合い方や読みの選択の在り方が垣間見える、興味深い事例といえるだろう。そして、こう

した検討を各話について繰り返していくなかで、本稿 2. や 3. で論じたような区切りをめぐる箇所でも、編者たちがそれぞれの見解を生み出していったと考えられる。

5. おわりに

本稿は、1600 年前後に刊行された Pithoeus 本と Rigaltius 本の構成の在り方を中心に、ファエドルス集の初期印刷本の様態について検討した。そして、巻の区分け、話の区分けという観点から印刷テクストと写本の関係を分析した結果、Pithoeus 本も Rigaltius 本も、(1) 写本の話順配列を堅持していること、その一方で、(2) 区切り位置やテクストの読みなどは、必ずしも写本どおりではなく編者が判断していること、が明らかとなった。(2) は近現代の校訂本も同様の特徴をもち、あるいは近世印刷本で示される判断が近現代まで残ることもあるが、(1) は近世印刷本に特有の特徴である。そして、(1) でありながら (2) であるために、Pithoeus 本と Rigaltius 本は同一のファエドルス集とはならず、また、Rigaltius 本も版によって様相を変えるのであり、いわば、それぞれの「ファエドルス集」として提示されることになる[26)]。

前述のとおり、18 世紀頃までの主要なファエドルス集刊行本は、Pithoeus 本や Rigaltius 本の構成を踏襲する。一方、近現代のファエドルス集は、写本の話順配列を変更するものであり、当時のファエドルス集とは構成の異なるものとなっていることに留意すべきである。その点では、はじめに触れたラ・フォンテーヌの場合は、Pithoeus 本か Rigaltius 本の系統の、「当時の」ファエドルス集を参照していたとみて問題ない。

ところで、17 世紀以来よく読まれたイソップ集のひとつとして、Isaac Nicolaus Nevelet (1590– ?) が編纂し、1610 年に刊行されたイソップ集が挙げられる。これは当時参照できたギリシア語およびラテン語の各種イソップ集をまとめ、さらに豊富な挿絵を含む、のべ 782 編からなる大著であるが、そこにファエドルス集も含まれている[27)]。ただし、Nevelet は自身の手でファエドルス集を編纂したのではなく、Rigaltius の初版本を利用した。したがって、たとえば第 1 巻序の 3 行目には、「Duplex libellis os est」と印刷されており[28)]、さらには、Rigaltius 初版

本にみられるナンバリングミスなどもそのまま残されている[29)]。その一方で、1660 年に再刊された Nevelet 本を確認すると、含まれるファエドルス集はあくまで Rigaltius 本初版のものであり、1617 年版等によるテクストの更新は反映されず、古いテクストが残り続ける。Nevelet 本の読者は、いつまで経ってもファエドルス集の os を見続け、dos を手にすることはないのである。

こうした事態は、写本 R とともに全体を再検討し、2 度に渡って改訂版を出版した Rigaltius からすると、不本意なものといえそうではあるが、ファエドルス集に限らず、往々にして起こりうることだろう。むしろ、作品の受容と普及を考える場合、Nevelet 本にみられる問題は、そのとき何がどのようにどの程度参照されうるか、また、何によって作品が広がりうるか、という観点から、それぞれを個別の対象として検討することの重要性を示唆しているようにも思われる[30)]。

注

1) ファエドルスおよびファエドルス集については、岩谷・西村（1998）, pp. 335–349 や 拙 論（2010）、Perry（1965）, pp. lxxiii–xcvi、Zago（2020）, pp. VII–X など。近年、Champlin（2005）や Libby（2010）のような、従来議論されてきたファエドルスの属性に疑義を呈する論考も登場しているが、ここでは従来どおりの記述としておく。
2) Avian., *Epistula ad Theodosium*。
3) Zago（2020）。とくに第 4 巻と第 5 巻が大幅に組み替えられている。
4) 写本 P：New York, Pierpont Morgan Library, M. 906, ff. 33–87。写本 R は後述のとおり焼失しており、現存しない。写本 P については、画像含めて写本そのものを参照できていないため、本稿では、詳細な翻刻がなされている Robert（1893）を参照した。
5) 写本 R に関する記述については、Zago（2020）の apparatus criticus を中心に、各種刊本の記載を参照した。
6) 各種刊本の記載のほか、Henderson（1999）, p. 310 にまとめられた情報を参照した。
7) ただし、写本 P と写本 R 以外に、ファエドルス集として形の整った新しい写本が発見されるわけでもないため、この時期の刊行本は、おもに 1596 年本を土台として、そのテクストに修正を加える、という体裁のものが中心である。
8) “Pierre Pithou” in *Catholic Encyclopedia*, Vol. 12, 1913。
9) Pithoeus（1596）, pp. 3–4。

10） Zago（2020）, p. X。

11） “Nicolas Rigault, garde de la bibliothèque du roi”, in Perrault, C., *Les Hommes illustres qui ont paru en France pendant ce siècle*, tome 2, 1700, pp. 63-64。

12） 写本 D：codex Reginensis Latinus 1616。9 世紀頃。Zago（2020）, p. XI 参照。なお、本稿では 1599 年の初版は参照できておらず、1600 年に刊行された版を参照した。

13） Zago（2020）, pp. XLIV-XLV。

14） Henderson（1999）など。拙論（2010）もその前提に基づくものである。

15） “Preface” in La Fontaine（1686）。日本語訳は今野（1972）, pp. 31-40。

16） 各話タイトルの日本語訳は次のとおり：①おしゃべりに答えるイソップ、②ロバとガッルス（キュベレーの神官）たち、③詩人。

17） 以下、各引用に付している翻訳は筆者による試訳である。

18） 各話タイトルの日本語訳は次のとおり：④詩人、⑤詩人、⑥パルティクロに宛てて、⑦詩人、⑧デメトリウス王と詩人メナンデル。なお、idem は「同じ」を意味するが、④⑤は同じ詩人を扱うわけではないため、⑤は「同じく、詩人」くらいだろう。以下、タイトルに含まれる idem は訳出していない。

19） Robert（1893）, pp. 69, 138。

20） Rigaltius（1617）, p. 95。

21） Ursin（1657）, Bentley（1726）, Burman（1727）の 3 種。

22） Müller（1867）, Müller（1877）, Havet（1895）, Postgate（1919）, Perry（1965）, Zago（2020）の 6 種を参照。

23） 各話タイトルの日本語訳は次のとおり：⑨作者、⑩雄牛、ライオンと略奪者、⑪狐と大蛇、⑫強欲な者へ。

24） Robert（1893）, p. 81。

25） Rigaltius 本が本文で写本 R の読みを選択した際の註記は、第 1 巻序の他にもう一例みられる。その箇所（pp. 71-2）では「Sic habet vetustissimus codex Remensis.（中略）Verior tamen mihi videtur scriptura Remnsis.」と記されるが、verior という言い回しは、その読みの真正性、合理性を評価するものである。読みを検討する姿勢としては、むしろこちらの方が一般的だろう。

26） このように考えると、現代の校訂本の、とりわけ各巻序や後書きをもとにファエドルスを論じる場合、写本との関わり上、取り扱いに注意が必要だろう。拙論（2010）も、執筆時点ではとくに疑いなく Perry（1965）等を用いた議論を行ったが、もしかしたら見直しを要するかもしれない。写本と印刷本に関わる問題は他の作品でも同様であるようには思われるが、イソップ関係はとくに個別化の傾向が強い印象である。

27） Nevelet 本に含まれる各種イソップ集の内訳については、拙著（2020）、p. 242 n. 27。

28） なお、この箇所に関する Nevelet の註（p. 643）によると、Pithoeus は Nevelet の叔父（avunculus）であるが、多くを語るには憚りがあるとのことである。

29） Rigaltius（1600）, pp. 120–121 で、LXVI のあとに LXIIX、LXIX と続く。Nevelet（1610）, pp. 433–434 では、アラビア数字表記で 66，68，69 となる。

30） 本稿は科学研究費助成事業（若手研究 21K12970）による助成の成果を含む。なお、筆者は、古代のもう一つの韻文イソップ集であるバブリオス集の写本について、拙論（2013）で論じた。その際、バブリオス集の場合、写本の段階で、その構成に写本編者の意向が大きく反映している可能性を指摘した。また、バブリオス集の校訂本は 19 世紀半ばにはじめて出版されるが、写本の配列を維持するものとなっている。本稿では、ファエドルス集の写本の配列そのものについて踏み込んだ議論はしていないが、とくに第 4 巻と第 5 巻にみられる話順の問題が、バブリオス集同様の事情によって発生しているのか、あるいは筆写者の誤りによるものなのか、など、改めて検討する必要はあるだろう。本稿注 4）にて述べているとおり、本稿では写本 P そのものは参照できていないため、今後、写本 P を確認したうえで、さらに議論を深めたい。

参考文献

Bentley, R.（1726）*P. Terentii Afri Comoediae, Phaedri Fabulae Aesopiae*, Cambridge.

Burman, P.（1727）*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum libri quinque*, Leiden.

Champlin, E.（2005）“Phaedrus the Fabulous”, *The Journal of Roman Studies*, Vol. 95, pp. 97–123.

Havet, L.（1895）Phaedri Augusti liberti Fabulae Aesopiae, Paris.

Henderson, J.（1999）“Phaedrus’ *Fables*: The Original Corpus”, *Mnemosyne*, Vol. 52, pp. 308–329.

La Fontaine, J. de（1668）*Fables choisies*, Paris.

Libby, B.B.（2010）“The intersection of poetic and imperial authority in Phaedrus’s *Fables*”, *Classical Quarterly*, Vol. 60, pp. 545–558.

Müller, L.（1867）*Phaedri Augusuti liberti Fabulae Aesopiae*, Leipzig.

Müller, L.（1877）*Phaedri Augusuti liberti Fabulae Aesopiae*, Leipzig.

Nevelet, I.N.（1610）*Mythologia Aesopica*, Frankfurt.

Perry, B.E.（1965）*Babrius and Phaedrus*, Cambridge.

Pithoeus, P.（1596）*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum liberi quinque,*

nunc primum in lucem editi, Troyes.
Postgate, J.P.（1919）*Phaedri Fabulae Aesopiae*, Oxford.
Rigaltius, N.（1600）*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum libri quinque*, Paris.
Rigaltius, N.（1617）*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum libri quinque, noua editio*, Paris.
Rigaltius, N.（1630）*Phaedri Augusti liberti Fabularum Aesopiarum libri quinque, noua editio, Festi Auieni Fabularum liber*, Paris.
Robert, U.（1893）*Les Fables de Phèdre. Édition paléographique publiée d'après le manuscrit Rosanbo*, Paris.
Ursin, J.H.（1657）*Phaedri Augusti liberti Fabulae Aesopiae*, Regensburg.
Zago, G.（2020）*Phaedrus Fabulae Aesopiae*, Berlin/Boston.
岩田智・西村賀子（1998）『イソップ風寓話集／パエドルス、バブリオス』、叢書アレクサンドリア図書館第 10 巻、国文社。
今野一雄（1972）『ラ・フォンテーヌ　寓話（上）』、岩波文庫 赤 514-1、岩波書店。
吉川斉（2010）「初期イソップ集成編者と「寓話」――ファエドルスおよびバブリオスの“イソップ寓話”認識――」、『東京大学西洋古典学研究室紀要』VI、pp. 35-67。
吉川斉（2013）「バブリオス集の受容と変質に関する一考察　――アトス写本の後辞が示すもの――」、『東京大学西洋古典学研究室紀要』8、pp. 29-63。
吉川斉（2020）『「イソップ寓話」の形成と展開―古代ギリシアから近代日本へ―』、知泉書館。